任期中から準備、やりたいことを仕事に

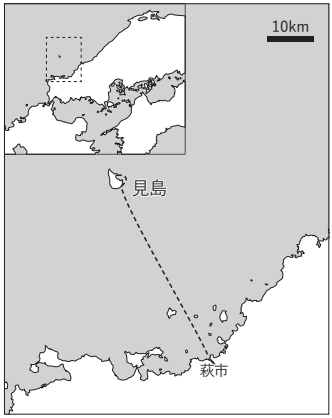
長富 幸子

島は仕事をつくる最適の場所

二十歳代後半、東京から香川県直島へ移住した頃から、故郷の見島（萩市）のことを漠然と考える機会が増えました。また、そのあと岡山県に移ったことで、藤井裕也さん（総務省地域おこし協力隊サポートデスク上級専門相談員。元岡山県美作市地域おこし協力隊）の活動などを通じて、地域おこし協力隊制度を知りました。

それから三年、父の病気をきっかけに島へのUターンを考え始めた時期に、偶然にも萩港で藤井さんと再会し、見島での協力隊員募集を教えていただき、応募にいたりました。

当時、私には特定の事業担当が与えられておらず、自分でテーマを見つけて活動するいわゆる「フリーミッション型」で、おもに観光振興に関わること・情報発信に関する活動がメイン。滞在型観光の体験プログラムの造成や、都市部での



見島（みしま）

萩市の北西約45kmの日本海にある島。面積7.73km^2、周囲17.5km、人口676人（2022年11月現在）。奈良時代初期から大陸との交易の中継地。防人の島として史蹟や観光資源にめぐまれる。対馬暖流の影響で温暖で農漁業が盛ん。島の水田は「見島八町八反」と呼ばれ、見事な景観をなす。

PRイベントへの参加、料理人の協力隊員と一緒に萩の各地域を回ってパエリアをつくる活動などを行ないました。

見島にとって必要なことは何か、誰がそれを望んでいるか？　任期中はその問いに困惑することもありましたが、正解はないのだと気づきました。人の数だけ思い描くものはあり、すべての人が納得する事業など存在しないからです。私は、「やりたいことを仕事にしている大人がどれだけ島にいるのか」が、島の未来にとって鍵になってくるのではないかと考えています。離島に限らず、若者が進学や地域に仕事がないために故郷を離れ、そのまま高齢化が進んでいくという話をよく耳にします。しかし、本当にそうなのでしょうか？　私は、自分が本当にやりたい仕事であれば、自分自身でつくっていけるものだと思っています。

幼少期からずっと「自分の仕事をつくる」ことを考えていた私にとって、見島はそれを試すのに最適の場所でした。現在、私は地域の方々に育てていただきながら、デザインの仕事に取り組んでいます。これからは場所に縛られず、もっと自由に自分の好きな場所で仕事をしていく時代になる、と思っていた矢先に新型コロナ感染症が拡大。リモートワークなどの働き方が広がり、離島という環境のハンデが一気に薄れたように感じます。もちろん、私の気持ちや希望する働き方を理解して、一緒に仕事をしてくださる皆さんがいるからこそ成り立っていると感謝しています。

見島北部の宇津観音堂にて。滞在型観光体験プログラムのモニターツアーの参加者と。

協力隊任期中にデザイン事業を開業

地域おこし協力隊の活動期間中は、任期後を考えて仕事を受けるよう心がけていました。萩市は協力隊員の副業を可としているため、私は自分が将来的に仕事としていきたいことは、できるだけ最初から受けるようにしていました。結果、任

鬼ようず(凧) づくりワークショップを東京で開催した(右が筆者)。

萩市の各地域をパエリアづくりで回った(写真は見島で実施した時のもの)。

期二年目に個人事業主としてデザイン事業「アトリエ・カルトン」を開業し、現在につながっています。また、この時期に市の担当職員や他部署の方々、先輩の皆さんなどから島内外での活動にお声がけいただいたことが、その後のデザイン事業の幅を広げるきっかけとなっており、大変感謝しています。さらに隊員三年目の夏からは市の協力隊OBである(株)ヨシダキカクの吉田知弘さんにお誘いいただき、イベントの企画や一棟貸しの宿の管理、事業者からの相談などたくさんの経験をさせていただいたことで、「つながり」という財産を得ることができました。片手で情報発信ができる時代になり、多くの方とSNS上でつながることもできますが、私はそれぞれのリアルな出会いやつながりをこれからも大切にしていきます。

一方、見島の隊員として着任しているのに、島外での活動が島のためになるのか？　といったご意見をいただいたこともありました。今だからはっきりと言えますが、島外とのつながりなしに島を拠点に活動していくことは、とても難しいと思います。また、私自身がそういった働き方、毎日を望みません。本土側の協力者と、島で主体的に動ける協力者がいてこそ、島のために行動ができるのだと考えています。

島内外の視点を大切にしながら働く

私は協力隊員の時から現在も変わらず、本土と島を行き来し、地域の人の想いを伝えるデザイン、イラストレーション

を軸に活動をしています。事業を始めた頃、まだ萩では、デザインやアイデアに対してお金を払うという感覚が薄かったように思います。しかし、最近では少しづつ景色が変わってきたように感じています。

また、これまでは協力隊OGという立場から地域活動をサポートしてきましたが、私自身も主体的にそういった活動に関わりたくなってきました。まず、協力隊の任期中に取り組んでいた島の暮らしや生活を体験するプログラムの運営を再開したいです。人数や規模こそ小さなものでしたが、活動したからこそ生まれた出会いもあり、意義深いものでした。コロナの影響を受け、高齢者の多い島での体験者の受け入れを制限していましたが、状況をみながら来年度は再開していきたいです。島外の視点で見島を見てもらうことは、島の魅力に気付くきっかけになり、住民の皆さんにとっての自信にもつながると思うからです。また、ゆくゆくは滞在施設などを展開したいと考えています。

いずれにしても「島の課題であるから働く」のではなく、「やりたいことを仕事にしている大人」になるという感覚を大切に、見島という余白の多い可能性だらけの「最先端の場所」を楽しんでいきたいです。■

受け入れ側からの言葉

若者の定着に向けた活躍に期待

昭和の時代に約3,000人が住んでいた見島の人口は現在700人ほど。小中学校の児童・生徒が6人、保育園児10人と人口減少と少子化が深刻になっています。住民のおもな職業は、農業と漁業、各組合職員、そして自衛隊です。島の活性化を図るため、見島観光協会をはじめとする各団体がイベントを実施するなど頑張っているところですが、コロナ禍で思うに任せない状況が続いています。

私は公民館長として、長富幸子さんと同じ事務所（萩市役所見島支所）で働いておりました。彼女はUターンで、活動報告を会報として発行していたほか、同観光協会のウェブサイトのリニューアルを行なってくれました。また、大手旅行会社と提携し、ツアーを立案するなど当初の目標を着々と実行に移すなどの成果をあげられました。島や住民の魅力を観光資源として捉え、その発掘のため奔走し、暮らしや生活を体験するプログラムも実施されました。加えて、公民館教室の講師として、赴任以前の職業経験を活かした料理教室の開催など多彩な才能を発揮、島の活性化に貢献いただきました。住民はもちろん、自衛隊員との人脈も築かれて、航空自衛隊見島分屯基地エイサー部に入部、エイサー踊りの公演に出演したこともあったようです。

若者が島でさまざまな企画を実行しても、それが一過性ではもったいない。若者の定着につなげるためにも、農漁業や観光業の魅力化が必要だと思いますが、今のままでは早晩島が沈没しかねないと、危惧しております。斬新な発想の下、活躍していただきたいと期待する者として、支援は惜しまない思いです。

（見島公民館長　天賀 保義）

長富 幸子（ながどみ さちこ）

萩市見島生まれ。高校進学を機に島を離れ、福岡、東京、香川、岡山で過ごしたのち、2018年に萩市地域おこし協力隊としてUターン。任期中にデザイン事業「アトリエ・カルトン（Atelier kalton）」を開業、現在はおもに萩市内の事業者のデザインやイラストレーションを手がける。